

【中学校の部】

最優秀賞

「互いに心をつないで」

登米市立米山中学校 三年 加藤 のぞみ

私には、生まれつき耳の聞こえにくい一つ年上の兄がいる。

しかし、耳が聞こえにくいとはいっても、運動神経が抜群で誰からも好かれる明るい性格の持ち主である兄と、幼い頃から比べられてきた私は、その度に兄に当たり、小学生の頃は喧嘩ばかりだつた。私はいつも、

「聞きとれないから、はつきり話して。」

と言つた。

わざと耳が聞こえにくい兄に発音の事を持ち出し、兄も私の言葉でより腹が立ち、喧嘩を長引かせていた。今思うと、もつと言ひ方があつたのではないかと後悔している。

兄が中学校に入学してすぐの頃、着けていた補聴器の事をクラスメイトから聞かれたらしいと母から伝えられた。兄は、「ちやんと教えたよ。」

と何気なく言つていたが、私はその時、そんな質問をしてきた兄のクラスメイトを無神経な人だと思つた。それは、兄が中学生となつて会う時間が減り、喧嘩をあまりしなくなつてから、兄の障害について本人に聞くことは良くないのでな

いかと思い始めていたからだ。

しかし、私はある時ふと、その考え方 자체が間違つてゐるのではないかと思つた。

なぜなら、当事者でもない私が兄の障害の事を、「大変そうだ。」

と思うのは、いじめの傍観者のように感じたからだ。

その後、少し勇気を出して、兄に直接補聴器の事を聞かれた出来事について聞いてみた。すると兄は、

「同じ小学校に通つていた友達以外、クラスの誰も僕の補聴器に気づいていないと思っていた。でも、気づいてくれた方が何倍も楽に学校生活が送れる。」

と話してくれた。

やはり、私が想像していた答えとは違つていた。私は、兄がちゃんと教えたと言つても、少し驚いたり戸惑つたりしたのではないかと思つていたが、兄は前向きな言葉で私の疑問に答えてくれた。この時初めて、兄が自分の障害について感じていたことを話してくれた。そして、障害の有無に関わらず、私と兄という対等な関係で話せた。

それからの私と兄は、前よりも本音で話せることが多くなつたと感じる。お互に直してほしいところを注意したり、素直にほめたりなど、思いを言葉にして伝えられるようになつた。

障害を持つ人にとって、健常者である私があたり前に思つてゐる事を苦労や負担だと思つてゐるかもしれない。障害とひとくくりにいつても、種類や重度によつて障害に対し抱く思いはそれぞれだと思う。だからこそ、障害者や健常者といふくくりではなく、個人の意見として話すことが、心でのバリアフリーにつながり、誰もが暮らしやすくなるのではないかと考えた。

どれだけ相手の事を考えていても、何かを言われたことでは傷ついたか、どんな言葉で心が救われたかなど、本人以外には分からるのは誰しも同じだ。しかし、それらが分からなくて、障害の有無だけでなく、肌の色や出身地の違い、性別など、自分とは様々な違いがある人に対して先入観を持たず、尊敬し合うことが大切だと思った。一人一人に向かい、お互いの気持ちを知ることで、自分の中の世界がもつと広がるのかもしない。